

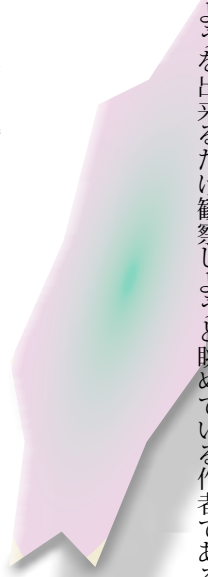
雨月

1 月 号



凍蝶のしばらく飛んでまた凍てし 櫻坡子

凍蝶は故郷の厳しい寒さの中で、冬季まで生きながらえた蝶である。しばらく飛んでいるかと思うと、また凍ててしまう。どの位凍ててしまうのか想像がつかないが、またび始めるのだろう。凍蝶の実態がどのようなものか、凍蝶のありようを出来るだけ観察しようと眺めている作者である。



(大橋 暁)

大寒と対す豪気のころもて こと 枝

「大寒と対す」、「豪気」の措辞に、二十四節氣の立冬、小雪、大雪、冬至、小寒を経て寒さ極まる大寒となり、やがて立春を迎えるという、日本ならではの判然とした季節感を今更ながら強く感ずる。「大寒」ではなく「大寒と」が能動的で、大寒にきっぱりと対峙する「豪気のころ」に通ずる。温暖化の天候不順に右往左往する近頃、羨ましいしましくも懐かしいお作である。

(浅井 青二)

冬めける

大橋 暁

春夏秋冬早々と冬めける
摩耶山の寺に山茶花確と咲く
対岸の初冬の十字架心澄む
日光の勢ひもなく冬めける
晩秋の奈良亡き旧友を偲びつつ
元興寺の仏像重々しき冬日
カレーショップ永年の店小春なり

寒きとの予報一転奈良小春
中国人晩秋の奈良占拠せり
せせらぎの奈良公園の冬に入る
冬紅葉微かの風に散り続く
紅葉越え芝生を越えて東大寺
落葉踏めば自づと思索深まりぬ
会場に遅れ気味なる冬帽子
大方は冬紅葉して散り急ぐ
歳と共に大根の味好むかな
緑やや落ち箕面連山冬に入る

新 人 賞



福井ひでとし

全天の星を背に初手水

闇深く遠寒柝の掠れゆく

千年を微笑む仏初桜

猪除けの灯の妖しさや五月闇

七つ星七つ見えぬて初蛭

打たれたる水やはらかに踏みにけり

長子ゆゑ継ぎて老いたり今年米



蒲田雅子

凍空に塔の相輪突き刺さる

冬林檎分かつ友あり家族あり

砂時計春の光をこぼしをり

風はみどりに土曜の午後の中之島

近江路を焦がしてをりぬ麦の秋

アンデスの風は何色トマト熟る

新涼や山家に使ふ竹の箸

雨月集

東京 大島寛治

暁選

箕面 佐藤淑子

名古屋 浅井青二

影法師道づれにして大根まく

秋の田の曠と遠嶺々まこと漠

水音の傍を離れず大根まく

怖ぢもせし猩々いまに在祭

大根を刻むリズムを得つつあり

蒼穹へ山車曳き上げむ砦坂

野仏に今日いく度の村時雨

畑柵の零余子ざざざ揺らし採る

障子貼り終へし仏間に灯をともし

蘆原に水路あり舟溜りあり

裸婦像に風の冷たき日なりけり

懈怠棄つべく初物の青蜜柑

友情は冬日和にも似てしかり

碧玉に点じ金柑金兆す

高槻 安部 和子

醉芙蓉開くや戦ぎやまざりし
教会の窓晴々と酔芙蓉
秋の日の池面に影を右近像
花も葉も薫りたちたり藤袴
悠々と甘藷の蔓の繁りたる
月明り木犀の香に立ちどまり
七五三詣での稚児の供七人

大東 大石 よし子

誰れも来ずどこへも行けず柿を剥く
表札はありし日のまま秋は逝く
新米を供へて語るひとしきり
ぎんなんを一合升に盛り上げて
絵本めく高原列車秋は行く
台風の去りたる安堵月丸ろし
豪雨禍の一面記事や朝寒し

名古屋 大橋 淳一

子規庵に種を貰ひし糸瓜これ
肉眼に見えざる高さ鷹渡る
鷹柱雲にとどきて消えゆけり
鳶の輪の更にその上鷹渡る
渡る鷹千五百羽を数へしと
一直線に青鷺渡る伊良湖岬
色変へぬ松背景に杜国句碑

大阪 谷村 祐治

滔々と渡舟の跡や十三夜
暮れ残る嶺に星連れ後の月
石像に踏まれし邪鬼の秋の声
茸狩る昔の勘をとりもどし
裏道の色も艶めき毒茸
木の実降る石灯籠の苔むして
訳言はず直に泣く子や秋の暮

豊中 西村しげ子

千里山 山田夏子

誕生日の師を祝ぎ合へる菊の秋
古書市に老若集ふ文化の日
三面鏡の三面を見る秋思かな
先づ梯子かけて始まる松手入
薬医門の風のそよ吹く竹の春
刀豆の反りやう正に刃なる
秋風や個々の持場を測量士

情篤き先師の忌日十三夜
菩提子や五十回忌の桜坡子に
傘寿祝ぎまぬらすことも文化の日
まばたかぬ蠅螂の目に射られをり
秋惜む千里寺さまの御句碑に
百の灯に百の営み燈火親し
吽の柘榴飾り食うぶは阿の柘榴

京都 竹内喜代子

祖父江 村上美智子

夫寝てよりの燈火のより親し
磨崖仏の裾を滔々秋の川
浜木綿の実や海光の延びて来し
秋光の開聞岳後に椰子並木
突堤の母子に鰯のよく釣れて
秋の日の射し入る機内データータイム
起重機の秋暑の天を領すかに

総身に朝日きらめき鷹渡る
底ぬけに澄める碧空鷹渡る
次つぎと山越ゆる鷹今日千羽
三吟句碑の供華のごとしや曼珠沙華
伊良湖岬流人の歌碑に秋の風
大旋回別れ惜しむか渡る鷹
秋蟬の蕉翁の杖に鳴く

野牡丹集

暁選

大阪 落合由季女

淀屋橋句座への道の緑美し
極上の新茶に令和祝ひ汲む
市大病院ドア開け放ち初夏の風
松蟬や名刹裏の湯殿あと
買物に子の行きくるる走り梅雨

松原 磯野しをり

色草に小流れ美しき昔道
十羽程一と輝きに鳥渡る
稲架の竹結び干す人ら親しくて
そくばくの小豆と茸干してあり
大根を干せる茶房に憩ひけり

堺 山本様子

長命の鐘ついてみる秋の暮
まだ若き尼僧の会釈新松子
峰寺の脇参道の柚子明り
経納めし寺にて秋の雲見上ぐ
道間へば塀よりのぞく柚子をさし

大阪 浅野順子

小鳥来て声競ふかに鳴き交す
秋天へ鯨光りをしみなく
山茶花垣張りつくごとく花咲ける
舟つなぐ八幡堀や暮の秋
見越の松に税の家並冬に入る

新千里 野上あつ子

名月や宇宙へ馳せる子等の夢
近況を無沙汰詫びつつ墓洗ふ
ひとり居の部屋の秋灯明るうす
捨て畑にも華やかさ添へ曼珠沙華
稲の香や能因塚を囲むかに

勾玉集

眺選

池田 多方清子

一天へ鴟の高音や仁徳陵
上賀茂の社家の長堀松手入
秋惜しむ女人高野の塔仰ぎ
峡の村被ひ隠して柿簾
秋の暮背中合はせの駅の椅子

茨木 蒲田豊彦

尼崎 稲岡みち子

干されたる青さの残る今年藁
黒々と爆ぜて轟く椿の実
団栗の真つ直ぐ落つる池の中
黄落の並木フランスパン抱へ
柿紅葉大事なことをさりげなく

重陽や献酒の並ぶ上賀茂社
社家町の戸毎の橋や秋あかね
舳ひ船の波間にまるぶ後の月
秋風や擬宝珠にのこる刀疵
丹念に灰汁抜き栗の渋皮煮

名古屋 桜井知恵子

千里山 西千代恵

小鳥来る弟子建立の武蔵の碑
零余子飯疎開せし里懐しき
星草に逆立つ八丁蜻蛉かな
山門に仁王の草履秋日濃し
手折りたる手よりこぼるる蕎麦の花

花水木の名に魁の薄紅葉
荒ぶれる風雨に耐へし紫苑かな
大釜に炊ぐお斎の栗の飯
木犀の香をとちこめて夜の帳
青岸渡寺への標上臙ほととぎす



雑

愛知 鈴木 淑子

あま 山内 光枝

東京 川村 欽子

名古屋 柴田 昭子

鷹渡る朝日に翼輝かせ
鷹渡る遙かな志摩の空めざし
渡る鷹無事であれよと伊良湖岬
男波越え鴨神島へまっしぐら
絶叫の声まき散らし鴨の群れ
古民家の宿は山の辺草の花
木曾五木守る柚の碑小鳥来る
県境の難所の峠木の実降る
廃寺跡千草の中の観世音
門前の江戸よりの茶屋柿の秋
祝賀御列祝ぐにこよなき秋日和
秋日燦一糸乱れぬ儀仗隊
身にしむや仰臥の子規を偲びみて
子規庵の濡れ緑糸瓜乾びをり
柿すだれ甘き香満てる甲州路
しげさや紅葉明りのある茶室
潮騒の小島明るき石路の花
黄はすでに日の斑あつめて石路の花

詠

御殿場 野木 富貴

茨木 蒲田 雅子

豊中 岩田 登世

戸々に咲き木犀の香のつながれる
鳩追うて機嫌直りし七五三
月下美人に向き合ひ良き夜過ごしけり
地平まですすきの銀波うねりをり
吹奏楽洩れ来る校舎木槿垣
枯葉舞ふ校庭子等の持久走
全容の富士高々と今朝の秋
落人の郷の山畑黍の風
鶉鳴くや遺跡の里の昼さがり
遺跡抱く村のをちこ柿熟るる
御旅所は村の入口小鳥来る
蔓ひいて手にひんやりと通草の実
五島へと思ひ馳せゆく稲の波
マリア像へ続く手摺に稲を干す
声にならぬ祈りの島や樁実
磯菊や千畳敷へ道細り
海さやか浦曲に残る教会堂

眺選

作品鑑賞

九月号

浅井青二 竹内喜代子

山田夏子 堀井英子

密門令子 山田天

大橋 暁

料亭のもと武家屋敷白菖蒲 浅井 青二

現在残っている武家屋敷の大方は江戸幕府から与えられた拝領屋敷や大名の下屋敷が多いという。掲句の料亭は格式高い武家屋敷の設えそのままに使われているのであろう。季語「白菖蒲」に料亭の気迫を垣間見る思いである。(喜代子)

武士の居住した家屋敷の城下町、高級料理屋もある辺に白菖蒲が凛と咲き誇っている。格がそのまま残され生きている。(暁)

熱気球上り宮址の風薫る 堀井 英子

熱気球は、熱した空気を送り込んで、その浮力で浮き上がり、それを抜いて降下する。水平の動きは風まかせである。平城京址での囁目か。ゆっくりとした宮址の空の熱気球の動きに、千三百年の時の流れと白鳳文化を偲ばれた。「風薫る」が絶妙。(青二)

若葉の香が吹き渡る野に熱気球が風に運ばれてゆく。奈良の都の址に佇み時間の経過と移り変わりを思われた。(暁)

明易し医の手に息子委ねぬて 片山喜久子

当り前のように思っている健康だが一旦家族の誰かが病気になるとそのありがたさがつくづく分る。ご息子が何やら難しい病名を告げられた。治療方針の説明の日か手術日か。母親としてどうすることもできない。医者に委ねて早も夜が明けて行く。(夏子)
医師を信じてご息の一切を祈る母の心情、刻々と時が流れて行く。白白と夜が明けてゆく不安一杯の母親。祈る母親。(暁)

河内晴れ田植の済みし田の続く 磯野しをり

冒頭「河内晴れ」と大きく打ち出されている。古代より開けた河内は米作り、綿作り、菜種作り等盛んな土地であった。田植の終わった田園風景を前にしてその広々とした見事さ、美しさに感銘を深くしたのである。正に「河内晴れ」である。(英子)

稲作が盛んな河内、田植の終わった広々とした美しい田が続いている。日本の原風景が思われ、河内晴れが小気味好い。(暁)

目高とり長靴に綱バケツもて 藤原 文代

目高は、日本に産する魚の最小の体形。歌にも唄われて子供達にも人気の高い生き物である。作者は目高取りに行かれた。多分お子様やお孫様方と。長靴で川にでも入られたのか。装備は完璧バケツには成果の目高が泳ぐ。最良の一日を過ごされた。(令子)

釣果とは少し違う目高捕り、万全の準備に意気揚々と出かけられた。子供達の嬉嬉として戯れる様子が見えてくる。(暁)